

## 都市美の発見とムーブメント



橋爪紳也氏  
(大阪市立大学大学院助教授)

## 略歴

1960年大阪市生まれ。1984年京都大学工学部卒業、1990年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。京都精華大学助教授、大阪市立大学文学部助教授を経て、2001年より現職。近代日本における都市開発思想の変遷、都市計画理念の歴史、ディスプレイデザインの技術史的考察等を研究テーマとする。

### 数多くの美しい景観づくりの取り組み

- 様々な制度や新しい発想で美しいものを数多くつくりってきたことは誇りにすべきではないか。ただ、綺麗なエリアや施設を様々な主体が作つたら、全体として必ずしも綺麗ではないところが出てくることが課題である。

### 戦前の都市美運動

- 大正期の都市計画に関する法制度の中には“美観”“美”という概念が取り込まれなかつた。その後“美”を回復する様々な動きがあり、それが今日につながつてゐる。
- 大正から昭和初期の頃には、20世紀をかけて作り上げるべき風景の理念があつた。超高層ビルが林立し、様々な交通手段で世界中が結ばれ、エネルギーが大量供給されるという利便性が高い生活空間こそ美しいといふことが世界で共有され、地域ごとの目標とされた。
- 日本でもアメリカのシビックアートに関する議論やシティビュー・ティフル運動に関心が持たれ、都市美協会などができる、都市計画法等の枠外ではあるが、事業の各レベルにおいて“美”について議論されるようになつた。
- 一方で、都市化が進むにつれ、各地で郷土を再発見する郷土芸術運動が起つてきつた。



### 美についての上位概念が無く、全体としての美しさがないことが問題

- 都市全体の“美”について上位概念として議論されないまま、都市の随所や各地方で議論がなされてきたことが現状につながつてゐる。
- 個別には“美”“景観”について考え、それぞれ美しいが、美しいものを集めるときれいではないことがあるという状況が問題である。

### 大阪の高い美観に対する意識と取り組み

- 大阪では、都市美として都市計画・都市構成に関する事業、都市醜の排除、緑化、空地の増大、公害の排除を想定していた。
- 都市計画とシビックアートという概念を分けて捉え、それぞれが大事であるという認識があり、美観地区をコントロールするため都市美審査委員会（アートコミッショナ）を設置するなど、美観に対する意識は高かつた。



### 近代化の中での都市美の発見

- 我々の都市は「西洋化」「立体化」「電化」という3つのベクトルで変化し続けてきたと考えたい。
- 風景の発見過程として考えると、「西洋化」は現代的な都市美の発見に、「立体化」は都市の上空や地下の景観の議論に、「電化」は従来と違う夜景の発見に繋がつた。
- 都市部で新しい風景や美観が発見される

ことにより、相対的に田園や村落において、郷土の概念が評価され、再確認された。

- 新しい名所や新しい景観がぞくぞくと発見された。大正末期から昭和初期には、世界標準を受け入れながら関西独自の美観が生み出されていた。



### これからの都市美に対する動きの方向性

- 水準は違うが、今の景観法も戦前期の考え方と変わっていないところがある。
- これからの都市美の動きは、都市の構成に関する美の創出を都市計画と深く関連させながら、港湾や河川などの各事業の中でつくっていくことを第一義とし、その先に都市醜を排除する試みや、環境に関わるデザインなどがある。

### 近畿から都市美運動を発信

- 市民意識の向上、美への理解を深めること、市民参加の中で新たな美を発見するプロ

セスが特に大事である。そういうものを含めて都市美のムーブメントを起していくということを、近畿から発信しても良いのではないか。

### 美を優先する上位概念が必要

- “美”が経済的な価値や他の公益性に対して優越するところを上位の概念にまで取り込めないと、各主体の取り組みにバラツキができる。

### 自治体独自の景観づくりの指針となる「文化の景観宣言」の作成

- 90年代にチャールズ皇太子が示した「A VISION OF BRITAIN」や真鶴町の「美的基準」のようなものを、各自治体が独自につくって景観を考えいくことを想定できるかどうか、また、その上位の指針をつくるかどうかが大事なことである。

- 「A VISION OF BRITAIN」を超える「文化の景観宣言(A VISION OF 近畿)」をつくるはどうか。

- 各自治体が独自に美的基準・規範を作る際に示唆に富む、近畿独自の緩やかな美的基準・規範、エリアのブランドづくりに繋がる画期的な規範をつくる広く宣伝してはと思う。

### 市民のコンセンサスが大切

- その策定、評価、管理のプロセスの中に市民参加を取り入れながら考えていく。美観運動は草の根運動と繋がつていかざるを得ないので、地域のコンセンサスを得られる基準づくりとしなければならない。

